

第4章 装身具

1 装身具の時期

上黒岩遺跡では第1次調査以来、縄文時代草創期後半および早期中頃の鹿角・石・貝殻を素材にした装身具が出土しており、総数は26点ある。

出土した地層は、第4層が21点（一部推定）、第6層が5点である。第4層は縄文早期の押型文土器の時期、第6層は縄文草創期の無文土器の時期である。第4層の炭素14年代値は大分県二日市洞穴の測定結果を借用するとおおよそ9,900-9,800 BP、較正年代は9,450-9,250 calBC [遠部2006]、すなわち今から約11,000年前で完新世初め、第6層の炭素14年代値は10,085±320 BP、較正年代は10,750-9,105 calBC (89.6%) すなわち今から約12,000年前で更新世最末期に位置している。

2 装身具の記載

装身具の出土層は[江坂・岡本・西田1967]によるが、調査前の採集品もあるらしく、一部推定を含む。装身具は、12のタカラガイの殻1点を除き、すべて久万高原町で保管している。以下、出土層ごとに記述する(図211・212, 表19)。

A区第4層 13点出土している。縄文早期の押型文土器の時期である。

1～6は、マガキガイの螺頭部から1cm前後下で横方向に破断し、その面を研磨、頂部中央も破断し孔をあけたあと研磨して作った丸玉。1・3・4の孔は不規則な形で回転穿孔した形跡はないので、自然にあいた孔であった可能性がよい。3は、下部が斜めに破壊されたあとの研磨はない。海岸で自然状態でこの形になったものを利用したようである。

7・8は、イモガイ(サヤガタイモ)の螺頭部を破壊除去したあと研磨して孔をあけている。水管溝側も尖った個所を除いたあと研磨している。

9～12は、タカラガイ(ハナマルユキ, カモンダカラ, メダカラ)の殻背面に大きな孔があいたもの。紐を通すための孔にはなっていないので、装身具というよりも呪具としたほうがよいだろう。9のように、孔の周縁を明らかに研磨しているもの、11のように孔の一部だけを研磨しているもの、10・12のように、殻背面が大きく破壊したあと研磨していないものがある。これらのことは、タカラガイの多くは自然状態であいた孔をもつ死貝を採取して利用した可能性がよいことを示している。

13は、巻貝の殻の芯の部分で作った太く短い管玉である。

14は、マルツノガイの両端を破断したあと研磨して作った短い管玉。

15は、ツノガイを薄く切断して作った小玉。

16は、サメ類の脊椎骨で棘突起が離脱したものの中央に孔をあけたもの。

17は、ハイガイの稚貝の殻頂に内面から敲いて1孔を穿ったもの。

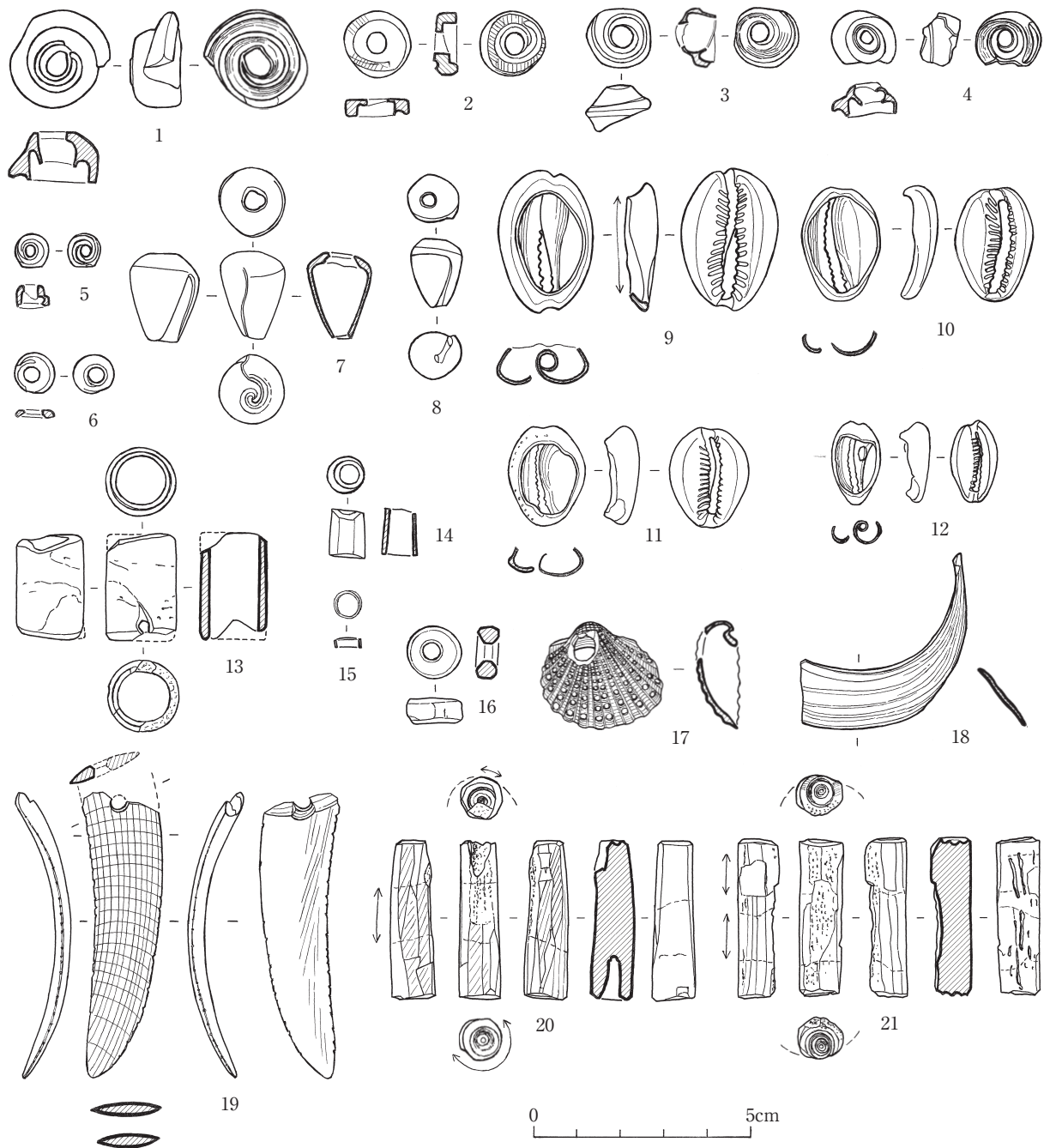


図211 装身具 1 (×2/3)

18は、二枚貝の殻で作った貝輪の破片。
19は、イノシシの牙製、猪牙を薄く半割しよく研磨している。周縁に細かな刻みを連続的にいれている。基部に1孔をあけ、その位置で壊れている。垂飾りであろう。
20・21は、鹿角製の棒状品で両端に同心円を沈刻している。中心を貫く孔はない。20は角の先端近く、21は角のやや太いところを利用し、両者とも削り痕が明瞭にのこっている。江坂らは耳

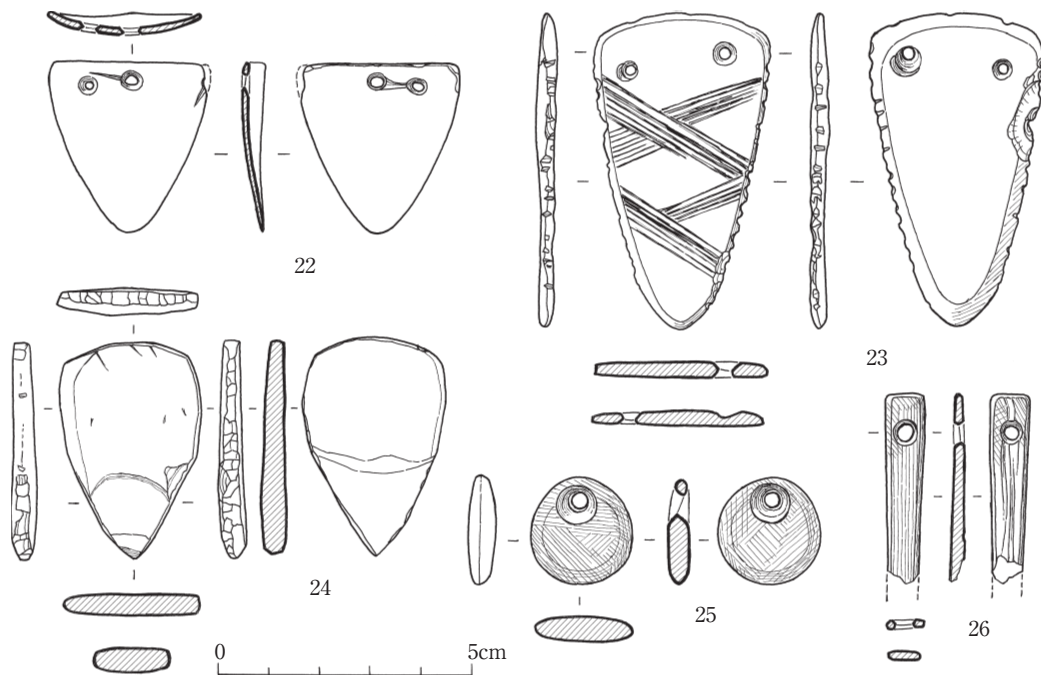


図212 装身具 2 (×2/3)

飾りの可能性を考えている [江坂ほか 1967: 写真図版 77]。

BC-2区6層 1点出土している。縄文章創期の無文土器の時期である。

22は、三角形の垂飾り。ハマグリ?のような二枚貝の殻で作ったもので、殻の縁を一部のこしている。上辺の中央に1孔、その左側にもう1孔を穿っている。

D区第6層 4点出土している。縄文章創期の無文土器の時期である。

23は、黒灰色の結晶片岩製の長三角形の垂飾りで、斜格子文のある表面は平らないし少し凹面、裏面は甲高になっている。扁平な破片を研磨して三角形の薄い板を作り、上辺に2箇所、左右の側辺に15箇所前後の小さな刻みをいれている。上辺の左右の隅に両面から穿孔して紐を通すようにしている。表面には2段重ねに斜格子状の粗い擦痕をいれて文様効果をあげている。

24は、黒灰色の千枚岩製で、長三角形の垂飾りの孔をあけていない未製品であろう。

25は、白色の石英の小さな自然礫に穿孔して、玉にしたもの。両面とも全面に直交する研磨痕がのこっているが、もともと扁球形の円礫であったようである。

26は、髪針の基部破片。鹿角の緻密質の部分で作っている。細長い板状で、基部に1孔をあけている。

3 小 結

装身具の多くは、第3次調査時に、A区第4層から集中的に出土している。A区は押型文土器の人骨28体分を含んでいた場所であるので、出土の状況は明らかでないけれども、装身具の多くは本来は人骨に伴っていた可能性が強い。調査関係者が人骨との関連を指摘していないのは、28

表19 装身具一覧表

番号	調査区	層位	種類	素材	長径(長さ)×短径(幅) (cm)	高さ (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)
1	2次D区	4	平玉	マガキガイ	2.30×2.00	1.15		5.51
2	2次D区	4	平玉	マガキガイ	1.50×1.50	0.55		1.40
3	4次A7区	4	平玉	マガキガイ	1.50×1.30	0.80		1.27
4	4次	4	平玉	マガキガイ	1.50×1.20	0.80		1.34
5			平玉	マガキガイ	2.30×2.00	1.15		5.51
6			平玉	マガキガイ	0.94×0.90	0.20		
7		4	丸玉	サヤガタイモ	1.55×1.45	2.00		3.20
8		4	丸玉	サヤガタイモ	1.20×1.10	1.55		1.32
9		4	穿孔貝	ハナマルユキ	3.2×2.15	1.0		5.29
10		4	穿孔貝	カモンダカラ	2.60×1.85	0.74		1.87
11			穿孔貝	カモンダカラ	2.30×1.75	0.80		
12	5次A6区	攪乱	穿孔貝	メダカラ	1.86×1.10	0.66		
13		4	管玉	巻貝	1.55×1.55	2.4		
14		4	管玉	マルツノガイ	8.2×8.0	1.08		0.79
15		4	小玉	ツノガイ	6.2×6.0	2.0		0.08
16		4	小玉	サメ脊椎骨	1.30×1.20	5.5		0.66
17			穿孔貝	ハイガイ	2.46×2.80	1.01		
18		4	貝輪	二枚貝	5.34(現)×1.40	1.4	1.0	
19		4	垂飾り	イノシシ牙	6.60(現)×1.65		4.0	4.06
20		4	耳飾り	鹿角	3.77×9.6(下)7.7(上)			3.24
21		4	耳飾り	鹿角	3.6×9.6(上)10.2(下)		9.0	3.48
22		4	垂飾り	二枚貝	3.35	3.20	1.5	3.13
23		6	垂飾り	結晶片岩	6.16	3.48	3.3	10.5
24	2次D区	6	垂飾り	千枚岩	4.25	2.80	5.0	8.89
25		6	丸玉	石英	2.08×2.00		4.5	3.9
26		6	髪針	鹿角	3.75(現)×0.8(上)0.6(下)		3.0	0.82

体のうち21体までが再葬または散乱骨で、埋葬する時点で遺体から装身具が遊離していたからであろう。

上黒岩の装身具の材質をみると、貝製品15点、鹿角製品3点、猪牙製品1点、魚骨製品1点、石製品2点となっている。貝はすべて海産のものであって、マガキガイ、イモガイ、タカラガイの占める割合が高いのが大きな特徴になっている。ツノガイ製の管玉や小玉が少ないのは、出土層の土を水洗して微細遺物を収集する方法が普及する以前の発掘であったという当時の状況を反映しているであろう。

タカラガイの背面の孔の周囲は破損後、縁が不規則のまま磨滅しているの、すでに孔があいていた死貝を採集し、縁の形が整っていない個所だけを研磨している可能性が大きい。マガキガイやイモガイのばあいも、自然状態で螺頂部だけになり孔があいた丸玉状のものを海岸で採取することができる、と忍澤成視は指摘している[忍澤2002:33]。さらに、上黒岩の貝類の同定をおこなった忍澤によると、素材貝の搬入先は、現在の海ならば、タカラガイ・イモガイ類、マガキガイは四国西岸の岩礁性海岸、マルツノガイは土佐湾であって、温暖な水温を示唆している⁽¹⁾。

上黒岩岩陰の装身具は、研究の早い段階で他に例のない押型文の時期の装身具の実態を明らかにした点で貴重であった。

その後、縄文早期の同様の装身具を出土している代表的な遺跡は、四国では愛媛県西予市城川町穴神洞洞窟 [長井編 2004]、中国地方では広島県神石高原町帝釈弘法滝洞窟 [中越ほか 1998 : 38~48]、中部地方では長野県北相木村栃原岩陰 [西沢 1982]、関東地方では埼玉県皆野町妙音寺洞穴 [黒坂編 1999] をあげることができる。いずれも押型文土器の時期である。穴神洞洞窟では、タカラガイ、イモガイ、ヤドツノガイ、ツノガイ、アゲマキ、アワビ、タケノコガイなど海産貝の種類は豊富で、切断・研磨したり穿孔したりして装身具に加工している。帝釈弘法滝洞窟では、ツノガイの管玉・小玉、イボキサゴの丸玉、穿孔したタカラガイ、殻頂に穿孔したハイガイが出土している。栃原岩陰でも、ツノガイの管玉、イモガイの平玉、穿孔したタカラガイやハイガイなどが出土している。妙音寺洞穴でもツノガイの管玉・小玉、イモガイの螺頂部を加工した丸玉、殻頂に穿孔したハイガイなどが出土している。これらの遺跡で素材の種類、加工したあとの形態は共通しており、海産貝の殻への共通するつよい嗜好とそれを海岸部から供給するシステムをもっていたことは明らかである。ハイガイを親玉、ツノガイを管玉と小玉、マガキガイを大型の小玉として一連の頸飾りを構成していたのであろう。

イモガイ・マガキガイの丸玉、ツノガイの管玉・小玉からなる装身具類のその後の状況は、縄文前期の埼玉県富士見市水子貝塚の出土品でうかがうことができる [加藤 2004 : 4~7]。また、南房総や三浦半島産の殻の背面を大きく除去した、あるいは殻背が破損したものを加工したタカラガイ (ホシキヌタ) は、縄文前期~後・晩期の関東から北海道の遺跡から検出されている [忍澤 2007 : 46]。その加工は紐通し用の小さな孔をあけるのではなく、縄文早期以来の殻背に大きな孔をあけたもので、装身具一般から区別される特別の機能をもっていたことを示している。

タカラガイは旧石器時代以来、呪具として用いられたが、ツノガイを管玉として装身具にすることも、ヨーロッパでは後期旧石器時代にさかんであって、フランスのパドゥグール、チェコのドルニ=ヴェストニツェやテプリュン遺跡などの例が知られている [Müller-Karpe 1966 : Taf. 5, 219, Jelínek 1975 : 426]。加工が容易な素材としてツノガイを使った管玉・小玉は、装身具の歴史では早い時期に世界的に流行したようである。

(春成秀爾)

註

(1)——装身具の観察と実測は、綿貫俊一と春成による。
巻貝の種の同定は、忍澤成視による。

参考文献

- 江坂輝弥・岡本健児・西田 栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」(日本考古学協会編)『日本の洞穴遺跡』224~236頁、写真図版57~78、平凡社。
- 忍澤成視 2000「縄文時代における貝製装身具の実際」『貝塚博物館紀要』第27号、1~24頁、千葉市立加曽利貝塚博物館。
- 2002「貝製品—実験考古学的手法による縄文時代貝製品研究—」『季刊考古学』第81号、32~36頁。
- 2007「縄文時代における房総半島の貝材利用の実態—千葉県市原市西広貝塚の貝製装身具の分析結果を中心に—」『動物考古学』第24号、25~52頁。
- 遠部 慎 2006「北・東部九州における縄文時代草創期末~早期前半の諸様相—大分県九重町二日市洞穴の年代測

- 定一』『九州縄文時代早期研究ノート』第4号, 19~25頁。
- 加藤秀之 2004「奥東京湾の骨角貝製品」『あらかわ』第7号, 1~27頁, あらかわ考古談話会。
- 黒坂禎二編 1999『妙音寺/妙音寺洞穴』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書, 第209集。
- 品川欣也・及川 穰 2008「高知県不動ヶ岩屋洞窟遺跡第二次調査出土資料の再検討」『考古学集刊』第4号, 81~96頁, 明治大学考古学研究室。
- 長井数秋編 2004『穴神洞・中津川洞発掘記録抄』城川町教育委員会。
- 中越利夫・佐々木正治・内山ひろせ 1998「帝釈弘法滝洞窟遺跡(第12次)の調査」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XⅢ, 19~48頁。
- 西沢寿晃 1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史』考古資料編, 全1巻(2), 主要遺跡(北・東信), 559~584頁, 長野県史刊行会。
- Jelínek J. 1975 *The Pictorial Encyclopedia of The Evolution of Man*, Hamlyn.
- Müller-Karpe, H. 1966 *Handbuch der Vorgeschichte*, Band I, Altsteinzeit. C.H. Beck.

付記

上黒岩遺跡の4層から出土したと推定される牙製の錐が、装身具と誤って、装身具の担当者のほうにまわってきていたので、余白を利用して報告しておく。

雄イノシシの下顎犬歯(猪牙)を素材にしたもので、牙を半割して薄くしたあと、エナメル質面の頬側を利用し、内側の一端を抉り一部研磨して先端を尖らせ鳥の嘴形にした錐である。先端は欠損、現長6.7cm(復元長7.4cm)、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ4.6gである。同様の牙錐は、縄文早期の例では長野県栃原岩陰出土品が知られている[金子・忍沢1986:198]。押型文土器の時期までさかのぼって存在する特徴的な牙器として注意しておきたい。

金子浩昌・忍沢成規 1986『骨角器の研究』縄文篇Ⅱ, 考古民俗叢書23, 慶友社。

(春成)

